

## 六、乃至一念

### 自証と教証

諸有衆生は、ただ名号を聞信することによって救われる。そしてその救いが衆生の上に成就された相こそ「信心歡喜」であつた。しかるに本願成就の文には「信心歡喜、乃至一念…」と、更に乃至一念の文字がある。「一念」の文字については既に詳しく述べておいた。即ち祖聖は、

「夫れ、眞實の信樂を按ずるに信樂に一念あり。一念とは、斯れ、信樂開發の時剋の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すなり。」

と聞信一念の自証を告白せられた。しかるに今、それについてこの本願成就の文を引きたまう所以は、經文の上に「信心歡喜乃至一念」と、聖人の自証と同一なる教証のあること示したまい、一念信樂開發の重大を現わしたものである。発射せられた弾丸は、必ずものに当る端のあるべく、振われたる劍は必ず人を斬るの初相があるであろう。名号の利劍は、一念自力疑心の妄雲を払い、衆生の業苦を切断せずにはおかない。「廣大難思の慶心」は、唯この他力回向の本願の実現する一念の端的に始まるのである。しかして、かかる聖人の信樂は、決して聖人の独断妄見ではなくて、すでに經に説かれたる処のものである。かるが故に「是を以て、大經に言く、諸有衆生…」と、本願成就の文を引きたまうたのである。しかして祖聖は更に『無量寿如来会』の文をも引いて助顯せられる。

「又、他方仏国の所有の衆生、無量寿如来の名号を聞きて、能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せん、と言へり。」

「一念の淨信」とはまことに重要尊重にして意義深き文字と言わなければならない。偽り多き衆生は、もしこの文なくば、あるいは救いを誤るであろう。聖人が成就文の一念を以て「信心の一念とせられたるもの、この如来会の文に教証を求めたもうたのである。」

### 一念の意義

蓮如上人曰く、

「たとへば我等如きの悪業煩惱の身なりというとも、一念阿弥陀仏に歸命せば、必ずその機を知ろしめして助けたまうべし」と。

これ上人が一生にわたつて、特に本仏に対する歸命の一念を高調せられた御文章の一節であるが、上人は、当時世間に流布されたと見える、いわゆる十劫安心の邪義に対して次の如く教えられた。

「夫れ、当流親鸞聖人の勸化の趣、近年諸国に於いて種々不同なり。これ大きに浅ましき次第なり。その故は、まず当流には他力の信心をもて、凡夫の往生を先とせられたるところに、その信心の方をばおしのけて沙汰せずして、その勸むる言にいはく『十劫正覺の初より、我等が往生を弥陀如来の定めましましたまへることを忘れぬが、即ち信心のすがたなり』といへり。これさらに弥陀に歸命して他力の信心を獲たる分はなし」と。

これ即ち正しき「一念の淨信」生ずることなく、邪説に惑わされて、久遠劫来の六道輪廻の妄心疑惑の粉粹されることなく、自力我慢にも当面することなく、第一義の問題を、過去十劫の彼方に押しやつて、切開手術を回避し、煩惱の一時的氣安めに止まろうとする煩惱の狡猾なる邪路を打破せられたものである。

実に衆生は、久遠劫来の自力我慢によつて固めて、我執をおし通さんとするものであり、三毒五欲、難治の三病によつて苦しみつつも、その病原にふれることを恐れ嫌い、病根を切

開する一念真実のメスに当面することを避け、更に自力貪欲の功利心によつて、出来得べくんば最少の精進と短き時日によつて、最大の果を獲んと計らうが故に、真実清浄、廣大難思の大信海も微塵大の凡心にさえぎられ、無条件救済の久遠の大慈悲も条件と誤られて、本願の規模ここに失われ、衆生はいよいよ深き迷路にさまようのである。

かくては衆生は、ついに問題の中心に入らず、たとえその名号を聞くとも、己を誤魔化し弁護し麻酔する毒酒となし、永久に我慢の城を出ずることを得ないであろう。ここに於いて、如来は、その大悲光明の果遂によつて、宿善開発するを待ち、一念現実にその本願の真実を回向して、信心歓喜、乃至一念せしめずばおかぬのである。

咲かざる花は花にあらず、燃えざる火はついに火に非ず、完全に、満足に、衆生の妄業を断ぜざれば、信はついに成就し得ないのである。帰命の一念こそ、まことに、他力浄土門に於ける、究竟至極の一大事因縁でなくてはならない。

されば「信樂開発の一念」こそは、聞くべきを聞き、見るべきを見、知るべきを知り、壊すべきを壊して、徹信徹証、真実教を聞くままに領解して開く人間の究竟的自覚の世界である。蓮師が常に「南無と帰命する一念」を最重要視せられたるも、亦当然と言うべきである。

### 宿善開発

蓮師は又、

「これによりて五重の義を立てたり、一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名号、この五重の義、成就せずば、往生は叶うべからずと見えたり。されば善知識というは、阿弥陀仏に帰命せよと言える使なり。宿善開発して善知識に会わずば、往生は叶うべからざるなり。しかれども帰する所の弥陀を棄てて、たゞ善知識ばかりを本とすべきこと、大きな過りなりと心得べきものなり。」

と五重の義を立て、宿善開発して善知識に会わずば往生は叶うべからずと、宿善開発の問題を出された。

実に、信樂開発するとは宿善開発することであつた。宿善開発しないならば、たとえ聖人の御化導に値うとも、聖人はただ一個の聖者であり、仏教者であり、御講師であり、あるいは単なる人であろう。まことに宿善開発せざれば善知識には会えない。善知識に会わないが故に教法に会わず、随つて如来の光明の威神功德を知らず、信心成就せず、ついに念仏生活はあり得ないであろう。ここにおいて、問題は宿善開発の問題となる。如来は如何にして、この問題を解きたもうのであるか。憶うにこの問題の鍵を握るものは三願転入である。私はここに三願転入を詳細に述べようとは思わないが、その大要をつかんで宿善開発の道程を知りたいと思う。

一切衆生は、第十八願の世界に非ずば、絶対に救われない。しかも、固き蕾の一瞬に開かざる如く、十八願の世界の、何等の香りを持たざる衆生をして、一瞬に念仏行者たらしむることは出来ない。

かつ又、女性を如何に磨くも装うも、ついに男子とならざる如く、「若し人善本無くんば、この経を聞くことを得ず。清浄有戒の者、乃し正法を聞くことを獲、曾更つて世尊を見しもの、則ち能く此の事を信ず。」(大經)と、内に宿善なくば、如何にするも教法を聞くことを得ず、たとえ宿善ありとも開発せずば花の幹のうちに潜むが如しであろう。

ここにおいて一切衆生は、如来光明の御催しによつて、宿善を成就しなければならぬし、宿善はその機境の上に開発されなくてはならない。ここにおいて如来すでに真実本願に住し

て、更に大悲方便の願を興したもうもの、即ち十九、二十の方便の願である。されば聖人は、化身土巻の初めにおいて、

「しかるに濁世の群萌、穢悪の含識(衆生のことなり)乃し九十五種之邪道を出でて、半満権実之法門(小乗大乘等一切の仏教)に入ると雖も、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て希なり、偽なる者は甚だ以て多く、虚なる者は甚だ以て滋し。是を以て、釈迦牟尼仏、福德蔵(十九願の世界)を顕説して群生海を誘引し、阿弥陀如来、本、誓願(十九願)を発して普く諸有海を化したまう。」

と説かれた。これ衆生海は、真実なるものは甚だ以て希に、虚偽なるものは甚だ多きが故に、この虚偽不実の衆生を十九願に誘いたもうことを示されたのである。十九願に於いては諸善万行を修めて、それによって至心、発願して、欲生我国すべきを誓われてある。これ衆生は悪逆にして、しかも悪逆を知らず、如来大悲の真実を知らざるが故に、身(散善)にも、心(定善)にも、善根功德を成就して救われんとするものである。

しかし、かかる衆生もやがて善の成就し難きを知り、念仏の功德広大なるを知り、やがてその念仏にたより、如来の名号を我が善根となし、ひとえに自力を励んで、念仏の功に力を入れて、「至心回向、欲生我国」と、二十願の世界に入るのである。二十願の衆生は、諸善の成就し難きことを知るも、猶、自力我慢をその内心に持ち、その今や亡ぼんとする念々の我を、自力念仏、自力信心によつて支えようとするものである。しかしながら到底そこには安らぎはあり得ない。念々に行き詰まるが故に、必死の努力によつて己をその滅亡より救わんが為、名号を掴んで往生を果遂せんとし、却つてついに小我の計らい保ちきれず、「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離之縁有ること無し。」と、機の真実を深信して、ついに無我に他力本願の領解者となるのである。これまことに二十願の果遂の誓によつて、何時しかに宿善開發して、善知識に会い、五重の義を成就して信心の行者となるのである。

### 乃至一念

南無阿弥陀仏は、永劫久遠にわたる唯一絶対の大行であり、常恒不変の真実在であり、一切群生の親にたまします。一切諸仏如来の本師であり、根本本体である。されば衆生信じてはじめて出て来るに非ず、衆生称えて何ものをも加うるに非ず、全く仏凡一如一体に融合して、唯本願の名号に摂取され回向されて生かさされるもの、即ち十八願の世界である。

されど、釈尊すでに受胎相、降生相、処宮相、出家相、降魔相、成道相、転法輪相、入涅槃相と八相成道を示したまい、親鸞聖人も亦九歳にして発菩提心し、二十年を聖道の法門に費し、二十九歳はじめて善知識に会うて念仏門に帰人せられた。個々の衆生は、個に於いて出発して、発芽し、花を咲かせて実となるも、念仏の人となれば、すでに成就したる名号に融合して、何ものも添えることなき世界に帰入するのである。されば自力の小路迷路より、久遠の大道に出でたる初一念こそ、聞其名号、信心歡喜、乃至一念でなければならぬ。

すでに久遠の大道である。一念は決して一念にとまらず、必ず純粹相続してよく永遠を貫き、無量念となるのである。これ即ち乃至一念と、乃至の文字ある所以である。乃至とは一多包容の語とて、一をも多をも、先をも後をも、全て兼ね収めたる語である。

されば、すでに本願文においては「至心、信樂、欲生我国、乃至十念」と、乃至十念と云い、今、成就文には乃至一念と説かれるのである。聖人の見解によれば、成就文の一念は信樂開發の一念であり、十念とは念仏相続のことである。善導大師は「上盡一形、下至一念」とて、多きは一生涯の念仏より、少きは一声の念仏まで、全てを乃至の語におさめて、本願文の乃

至十念も、成就文の乃至一念をも念仏とせられ、法然上人亦、この意をつがれた。しかるに祖聖は、乃至一念の信心、内に開けば、直ち口業に発露して、乃至十念の念仏となるとせられた。これ師資相承を乱されたものでなくて、念仏の如実ならんこと求め、純粹信の成就を以て重しとなし、本願名号さながらの念仏の世界を開顕せられたのである。

かくて如来の本願は、六道四生の因を亡し、果を滅して、乃至一念の淨信を成就して成仏の道路を開き、不断相続の念仏行に乗托して往生淨土の志願を満足するのである。念仏行の相続はそのまゝ信樂の相続である。これを憶念と言われる。